様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５３０８３５

研究課題名（和文）成人期の世代性（ジェネラティビティ）の発達が時間的展望の再編成に及ぼす影響の研究

研究課題名（英文）Effect of generativity on reorganization of time perspective in adulthood

研究代表者
都筑　学（Tsuzuki, Manabu）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：９０１４９４７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、成人が他世代の人々との交流を通じて、時間的展望を再編成する過程を発達心理学の視点から検討し、質問紙調査で得られたデータの分析によって、世代性（ジェネラティビティ）の発達が時間的展望の形成及ぼす影響を明らかにすることを目的としていた。20～24歳、25～29歳、30～34歳、35～39歳、40～44歳、45～49歳、50～54歳、55～59歳、60～64歳、65～69歳の10段階の年齢区分において、男女200名ずつ、全体で4,000名を対象としたインターネット調査を実施した。得られた結果から、20～60歳における、時間的展望とジェネラティビティとの発達的関連が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research examined on the process of reorganizing their time perspective through exchanging activities with people of other generations from the viewpoint of developmental psychology. Empirical data was collected to clarify the influence of the development of generativity on the formation of time perspective. Participants were 10 different age groups, from 20 to 24 years old, 25 to 29 years old, 30 to 34 years old, 35 to 39 years old, 40 to 44 years old, 45 to 49 years old, 50 to 54 years old, 55 to 59 years old, 60 to 64 years old, 65 to 69 years old. Internet survey was conducted for 200 males and 200 females for each group, covering 4,000 in total. Obtained results suggested that developmental relationship between time perspective and generativity ranged from 20 to 60 years old.

研究分野：発達心理学

キーワード：ジェネラティビティ　時間的展望　成人期　老年期　世代

１．研究開始当初の背景

時間的展望とは、個人の過去・現在・未来についての見解の総体であり、個人の行動を方向づけ、動機づける機能を担っている。児童期・青年期のみならず、成人期以降の人格発達をとらえる上でも、時間的展望はきわめて重要な概念である。

研究代表者は、児童期から青年期までを対象とした時間的展望の研究を 30 年近くにわたっておこなってきた。この 10 数年は、4 つの科学研究費補助金を受けて、環境移行に伴う時間的展望の変化を縦断的調査によって得られたデータにもとづいて検討してきた。一連の研究を通じて、児童期から青年期に至るまでの時間的展望の発達過程を明らかにしてきた。

本研究は、児童期から青年期までの時間的展望の発達的研究を成人期にまで拡張するものである。青年期や老人期と比較して、成人期を対象とした時間的展望の研究は数少なく（Nurmi, 2005; 白井, 1997）、その発達は体系的には明らかにされていない。時間的展望の理論を生涯発達的視点から構築していく上でも、成人期の時間的展望研究を進めることはきわめて重要である。

これまで時間的展望の研究では、個人レベルにおいて発達的な検討がおこなわれてきた。時間的展望の発達を、他者とのかかわりという観点から分析していくことは重要な課題である（都筑・白井, 2007）。とりわけ、成人は家庭や職場において、親や教師、上司という立場で年下の人と接する機会が多い。そのような異なる世代間の相互関係としての世代性（ジェネラティビティ）の視点に立ち、自己と他者との関係から時間的展望を検討することは非常に意義深い。

２．研究の目的

本研究は、研究代表者がおこなってきた児童期から青年期にかけての時間的展望の発達的研究を成人期にまで範囲を拡張するものである。研究の分析単位として、自己と他者の関係を用い、それを基本に時間的展望を検討する。成人が他の世代との交流を通して時間的展望を再編成する過程に焦点を当て、質問紙調査を通じて、世代性（ジェネラティビティ）の発達が時間的展望に及ぼす影響を明らかにすることを主要な目的とする。

３．研究の方法

・研究対象

20～24 歳、25～29 歳、30～34 歳、35～39 歳、40～44 歳、45～49 歳、50～54 歳、55～59 歳、60～64 歳、65～69 歳の 10 段階の年齢区分において、それぞれ男女 200 名ずつ、全体で 4,000 名。

・研究方法

インターネット調査会社を通じて、調査を実施した。

使用した調査項目は、以下の通りである。

①Markers of adulthood

「学校を卒業している（あるいは，修了している）（=現在，教育機関に通っていない）」「生計を立てるのに十分な収入のある仕事をしている（就職，起業，自営など）」「親元を離れて暮らしている」「親から経済的に独立している」「結婚している」「子どもを持っている」の 7 項目（2 件法）

②ISRI

「私は, よく自分の意見を変える」「私は, 自分が何になりたいかをはっきりと考えている」など 11 項目(5 件法)

③人生満足度

「うれしさ，喜び」「幸せ」「余暇活動に満足」「友だち関係に満足」など 10 項目（6 件法）

④生活満足度

「自分の生活はうまくいっています」「自分の生活に満足しています」「今の生活の

中で変えたいと思うことがたくさんあります」など 10 項目(6 件法)

⑤生活感情

「大体において，私の人生は理想に近い」「私の人生は，すばらしい状態である」など 5 項目（7 件法）

⑥EPSI

「自分のことを大人だと思う」「人生の「居場所」が見つかっている」など 5 項目（5 件法）

⑦DIDS

「自分がどんな人生を進むか，決めた」「自分が進もうとする人生にはどのようなものがあるのか，すすんで考える」「人生で本当にやりとげたいことは何か，はっきりしない」など 25 項目（5 件法）

⑧目標意識尺度

「自分の将来は自分で切り開く自信がある」「私は物事を時の弾みで決定してしまうことが多い」「私には将来の目標がある」など 35 項目（5 件法）

⑨GCS-R

「私は夢のようなことを考えるのが好きだ」「子どもの世話をよくする」「私は自分の死後に残るようなことは何もしていないと思う」など 20 項目（4 件法）

⑩ジェネラティビティ尺度

「私が死んでも，人は私のことを覚えていてくれるだろう」「自分の経験や知識を人に伝えるようにしている」「無理のない範囲で，募金をしたい」など 20 項目（5 件法）

これらの質問項目は、ジェネラティビティ、時間的展望、アイデンティティ、大人の感覚を測定し、それらの相互関連を検討するものであった。インターネット調査の強みを活かして、調査対象者を全国から得ることができたと同時に、学歴や職歴に関しても、多様な調査対象者からの回答を得ることができた。

４．研究成果

20 歳代から 60 歳代までの横断的なデータとして、時間的展望がいかなる変化を遂げるのかを明らかにするために、年代ごとの得点を比較した。得られた結果から、20～60 歳にかけて、時間的展望の基礎的認知能力である計画性や時間管理の得点が高くなるとともに、将来への希望は増加し、空虚感が減少するという発達的な傾向が明らかになった。

こうした時間的展望の発達的な変化の背後にあると考えられる、ジェネラティビティの影響を検討するために、2 つのジェネラティビティの尺度の 8 つの下位尺度と時間的展望の 6 つの下位尺度との間の相関を求めた。その結果、将来への希望と創造性（r=.28）、世話（r-.34）、世代継承性（r＝.54）、遺産（r=.51）、知識伝達（r=.44）、貢献（r=.50）の間に 1%水準で優位な中程度の相関が認められた。時間的展望の基礎的認知能力である時間管理と創造性（r=.35）、世話（r-.44）、世代継承性（r＝.44）、遺産（r=.39）、知識伝達（r=.46）、貢献（r=.45）の間に 1%水準で優位な中程度の相関が認められた。

これらの結果から、他の世代との交流を通じてジェネラティビティという力を形成していくことが、個人の時間的展望の発達に及ぼす影響が少なくないことが示されたといえる。

本研究で得られた結果については、2017 年夏にオランダのユトレヒトで開催される第 18 回ヨーロッパ発達心理学会において、研究発表をおこなう予定である。国際的な時間的展望研究グループのなかで、今後も研究成果を発表していくつもりである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　1　件）
Tsuzuki,M. Developmental change of time perspective in adulthood and age person. The 18th European Conference of Developmental Psychology, Netherland, Etrecht, 2017,September, 1.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　都筑　学（Tsuzuki Manabu）
　中央大学・文学部・教授
　研究者番号：9014977

(2)研究分担者
　　なし　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　なし　　（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
　　なし　　（　　）